

雑木林など涼やかな森にた
たずむと、なんともいえない
落ち着いた気分になれる。自
然が人間の脳波や心にシンク
ロする瞬間なのだろうが、こ
のこの大切さを私たちは忘
れがちである。これはあたり
まえのことをどこかに置き忘

納涼随想

は嫌いな気分ではないしある
種の心地よさを伴っている。
樹間から遠くに雪を戴いた
山々を眺め、さわやかな緑の
風に吹かれながら歩くブナ林
の道など自然が導いてくれる
心の醸成空間である。やがて
大空が広がる峠の一角に出る。



れた現代生活の落とし穴とで
もいえようか。

職業柄、山と向き合う時間
が多い私は、必然的に森や大
空の下を思考の空間にする習
慣が身につけている。このこ
とは裏返せば長年かかって自
ずから社会に適合しにくい体
質を作り上げてしまったとい
えなくもない。しかし、これ

緑陰の道

藤原 優太郎

(「あきた山の學校」代表 昭和38年卒)

そこには新しい世界が開け
れまてとは別の風が吹いてい
る。宮沢賢治は心象風景とい
い、そこに森羅万象の世界を
描いた。またある詩人は「峠
はふたつの風景をとり合うと
ころ」といい、「ひとつを失
うことなしに新しい世界には
入ってゆけない」といった。
こうした状況や風景が非日常

的な日常の自身の心象風景と
重なっている。若い頃に取り
組んだ山の世界とはまた異な
る次元のものだが、これが歳
を重ねるといふことの証明な
のかも知れない。
山や古い峠道を歩くという
ことを今の自分は、その場所
や道をかけがえのない思考の
空間と位置づけ、街や書齋で
はなかなか浮かんできにくい
発想の回路としている。つま
り自分が立つ位置は山や森を
抜きにしては考えられないと
いうことだ。むろん仙人のよ
うに達観したものなどではな
く、自然のもつ大きな力や環
境を自己の身体や脳に一時借
りして満足を得るといふだけ
の話ではあるのだが。
森の梢を渡る風や谷間のせ
せらぎは間違いなく全身が包
まれる清涼剤であり、冷たい
無情の風が吹きすさぶ現代社
会とは比較のしようもない安
心感をもたらしてくれるもの
だ。
高校時代からのめり込んだ
山の世界、紅顔日に日に顧み
思う年代になった今も、自然
との関わり合いをわが世わが
世の天職と思ひ、緑陰に差し
込む太陽の光を受けながら今
日もどこかの山や森に足を運
ぶ日々が続いている。

母校に中国から留学生

唐 孟瑩さん
タン モンイン



この四月から、約一年間の
予定で、母校に中国からのA
F S留学生が在籍している。
安徽省にある

茶道部で 成果披露

かつて秋田
高校の国語
科に勤務し
ていた柴山
氏の元に週
一度通って

始めて、このたびの留学につ
ながったのだという。ただ、
英語は中国にいた時分から勉
強していたのであまり不自由
しないが、日本語はほとんど
理解できないので、日常のコ
ミュニケーションにもまだ苦
労が少なくない。

そこで、A F S留学生とし
て同時期に秋田に入り、秋田
南高校に在籍しているオース
トラリア及び韓国からの留学
生とともに、すでに五月から
秋田
高校の国語
科に勤務し
ていた柴山
氏の元に週
一度通って

う女生徒で、現在は、手形住
吉町在住の高橋衛氏宅にホー
ムステイし、毎日、自転車
で元気に登校している。

学校では二年B組(担任・
羽深美希子先生)に所属して、
すべての授業に出席している
ほか、放課後は茶道部の一員
として課外活動にも励んでい
る。

孟瑩さんは小学校五年生の
時に、日中交流事業で一週間
だけが久留米市に滞在した
経験があり、その頃から日本
や日本文化に興味関心をもち

秋高生になって三カ月以上
経ったが、この間で一番楽し
かったのは秋高祭で、とくに
クラスデコレーションでは大
いに頑張ったし、茶道部での
練習成果も披露して仲間との
交流を広げ、日本文化への理
解も深めることができた。
この後の最大の楽しみは秋
の修学旅行だそうで、日本の
歴史や文化の原点となる地へ
の旅を今から大いに期待して
いると語ってくれた。